

高齢社会に対応した  
生涯学習のあり方について  
～シニア・団塊世代の力を  
地域社会に活かすために～

(提 言)

平成27(2015)年1月

第9期 葛飾区社会教育委員の会議

# 高齢社会に対応した生涯学習のあり方について

## (提 言)

本会議において、標記のテーマについて協議を重ねてきましたが、このたびこれを取りまとめましたので提言します。

平成 27 (2015) 年 1 月 27 日

葛飾区教育委員会 殿

第 9 期 葛飾区社会教育委員の会議

議 長 辻 浩

副議長 大島 英樹

委 員 飛田 健一

委 員 朴木 一史

副議長 西村 国輔

委 員 餌取 愛子

委 員 牛木 明

## 目 次

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| はじめに                               | 1  |
| 1 高齢社会と生涯学習                        | 2  |
| (1) 長寿社会の到来                        |    |
| (2) 高齢社会の生涯学習                      |    |
| 2 葛飾の状況と課題                         | 4  |
| (1) 高齢者の生涯学習施策の現況                  |    |
| (2) 本区の高齢者の学習や活動を取り巻く課題            |    |
| 3 高齢社会に対応した生涯学習施策                  |    |
| －「生きがい支援」から「社会参加」への橋渡し－            | 9  |
| (1) 地域に出会うための学習・文化活動の仕組みづくり        |    |
| (2) “地域デビュー”のきっかけづくりと情報提供          |    |
| (3) コーディネーターの養成                    |    |
| (4) 庁内外の高齢者事業関連部署との連携・協働           |    |
| 4 学習・文化活動から地域活動への架け橋               |    |
| －施策のイメージ－                          | 12 |
| (1) 地域に出会うための学習・文化活動の機会            |    |
| (2) 団体や事業の情報提供・団体紹介・交流イベント（見本市）の開催 |    |
| (3) 「かつしか区民大学」で高齢者の地域活動に向けた仕組みづくり  |    |
| おわりに                               | 16 |
| 用語解説                               | 17 |
| 資料編                                | 20 |

## はじめに

私たち葛飾区社会教育委員（\*1・\*2）の会議では、人口高齢化が進む地域の中で高齢者の学習のあり方を求めて、「高齢社会に対応した生涯学習（\*3）のあり方について～シニア・団塊世代の力を地域社会に活かすために～」というテーマで、2年間にわたり区内外の事例を参考にするとともに各委員がもつ情報や体験を重ねて、協議してきました。

少子高齢社会と急激な人口減少に直面している今日、地域や社会を支える人材として高齢者をとらえることが求められるようになってきました。生涯学習においても、学んだことを地域に還元してもらいたいとの期待が寄せられています。

しかし、長年、仕事を通して社会に貢献し、そのために身体や心をすり減らしてきた人たちに対して、次は地域で貢献してもらいたいと期待するだけでは、うまくいきません。ようやく自由な時間をもつことができた人に、人生を輝かせるために、どのようなきっかけを提供し、どう支援していけばよいのかを、真剣に考える必要があります。

高齢期をいかに生きるかということは、新しい価値観や自己実現の深い理解と合わせて考えるべき課題です。また、社会とのかかわりを続け、社会参加や地域貢献をしていくことも、高齢期をいかに生きるかということと結びつけて考えられなければなりません。価値観や自己実現、社会参加、地域貢献のあり方を、一人ひとりが十分な情報を得ながら自由に決めていくところに、憲法や教育基本法に定められた教育の本来の姿があります。人格を完成させ人生を締めくくる高齢期にふさわしい、学びと活動が相互にかかわる生涯学習のあり方を提言します。

関係部局には、ぜひ本提言の趣旨を尊重いただき、具体的な施策につなげることを期待します。

（\*）… 17 ページからの用語解説を参照のこと

## 1 高齢社会と生涯学習

### (1) 長寿社会の到来

平成 27 年 1 月 1 日時点における区の人口は 449,527 人で、そのうち 65 歳以上の高齢者人口は 108,253 人(約 24.1%)です。平成元年の高齢者人口は、42,268 人(約 10.4%)でしたので、「平成」に入ってから四半世紀の間に高齢者人口は 2.5 倍、4 人に 1 人が高齢者という状況になりました。

急速な高齢化が進む中、区は 65 歳以上の方々を対象に、3 年ごとに「高齢者の生活に関する調査」(34~37 ページ参照)を行っています。平成 26 年 3 月にまとめられた調査結果を見ると、「今後、どのような活動に取り組みたいと考えているのか」という質問に対して、「収入のある仕事に就きたい」という回答(10.1%)を上回って、「趣味・楽しみのための活動に取り組みたい」という回答(22.8%)があり、高齢期の生活を豊かに楽しく送っていきたいと考えている方が多いことがうかがえます。

さらに同じ調査では、約半数の高齢者が「趣味・楽しみのための活動」や「ジョギングやスポーツ活動」を中心に、日ごろから何らかの活動を行っているという結果も出ています。

### (2) 高齢社会の生涯学習

本区の高齢者で「趣味・楽しみのための活動」や「ジョギングやスポーツ活動」等に取り組んでいる人は多いものの、およそ半数の高齢者はこれらの活動を行っていません。したがって、高齢社会の中で生涯学習に期待されることは、学習・文化活動と地域活動を通して、高齢者の自己実現を支援することです。

多くの人は、仕事をもっている時には忙しくて、関心のある学習・文化活動になかなか取り組めないでいます。そういう人たちが、時間のゆとりができた高齢期になって、長い間やりたいたいと思っていたことに取り組めるようにすることが大切です。このように生涯学習は、人生を豊かにすることに貢献しなければなりません。

しかし、高齢期の人たちは、たんに学習・文化活動をするだけで満足できないということもあります。いきいきと暮らし自己実現するためには、自らの所属する団体の中で何らかの役割を果たし、他の人との関係の中で自分の存在を確認できるということが必要です。さらに、そのような中で、高齢者が地域社会の担い手として期待され、それに応えることで、生きがいを感じるというこ

ともあります。

生涯学習は、一人ひとりが関心のあることに楽しんで取り組むこと、自分を取り巻く人との豊かな交流をもつこと、地域社会の担い手として活動すること—この3つを統合した自己実現を応援しなければなりません。



社会教育委員の会議の様子

## 2 葛飾の状況と課題

### (1) 高齢者の生涯学習施策の現況

区および教育委員会では、高齢者がそれぞれのライフスタイルにあわせ、生きがいをもち、意欲的に活動できるよう、様々な講座等の事業を開催しています。

このうち高齢者支援課では、高齢者の社会参加とボランティア活動のきっかけづくりとなるよう様々なボランティア養成講座を実施しており、講座の参加者を中心に自主グループが結成され、活動を継続しています。また、「生きがい支援講座」や「シルバーカレッジ」では、趣味や楽しみの講座、文学や歴史といった教養のための講座、健康の維持・増進を目的とした講座を開催しており、「シルバーカレッジ」には「かつしか区民大学(\*4) 単位認定講座」も含まれています。

生涯学習課では、「出前教室」と「ストレッチ教室」を高齢者向けに行っており、多くの方が参加しています。「出前教室」では、外出が困難な高齢者や障害者、あるいはそれらの方で構成されたグループに対して講師を派遣しています。

また、「かつしか区民大学」として年間約70講座を実施し、高齢者を含む多くの区民が受講しています。その中で、子育て・読み聞かせ・環境・農業・健康等、様々な分野のボランティア養成講座を開催し、地域に貢献できる人材育成を目指しています。あわせて、これらの講座から生まれた自主グループを支援するとともに、区内各種団体等との協働(\*5)による団体連携講座や区民運営委員会による講座に取り組んでいます。

郷土と天文の博物館においても、郷土葛飾に関する各種講座等を実施するとともに、博物館ボランティアの養成に取り組んでおり、高齢者も多数参加しています。

生涯スポーツ課では、「高齢者はつらつ体操」「グラウンド・ゴルフ教室」「ダーツ教室」「バウンドテニス教室」「シニアスキー教室」等のスポーツ事業を通して、高齢者が自主的・積極的にスポーツを行うことができる環境を整備しています。

### (2) 本区の高齢者の学習や活動を取り巻く課題

区が開催している高齢者向け講座の参加状況をみると、趣味や楽しみを目的とした講座や健康の維持・増進を目的とした講座には、毎回、多くの方が参加

しています。また、実際に講座に参加した高齢者の多くから、「満足できる内容だった」というアンケートの回答があります。

しかし、ボランティア活動を始めことを主眼に置いた講座では、参加者が多くないばかりか、実際にボランティア活動を始め方も参加者の半数以下にとどまっています。

このように、学んだことが十分に地域社会に還元されているとは言えない状況があります。

一方、区内では多くの団体・サークルが日常的に活動していますが、その構成メンバーの主流は高齢者です。また、地域活動や様々な分野のボランティア活動においても、シニア層がその主たる担い手となっています。

しかし、それらの多くの団体が、リーダーや組織運営の担い手の不足、会員の高齢化等の課題を抱えていることが、会員からの聞き取り等からうかがえます。また、一口に高齢者といっても、戦前・戦中に教育を受けた高齢者と戦後教育を受けた高齢者の間では価値観の相違が見られ、高齢者の世代間ギャップという課題も見えてきます。



## 《コラム①》

### 団体運営の担い手の不足

#### 「NPO法人 葛飾アクティブ.COM」の活動から

私たちの団体への入会動機は、新たな仲間をつくりたい、自分の居場所を見つけたい、あるいはそれまで培ってきた自分のスキルを活かしたい、というように様々なものがあります。このように多様な価値観をもった会員をまとめるためには、世話人等、組織運営を担う人が必要です。

設立当初は、会員は現在より少なかったものの、全会員が初心に燃えて活動していましたが、創立から10年以上が経過して会員も増え、組織が大きくなった今日では、世話人の存在と役割はますます重要になってきています。

しかし、今、その世話人の担い手が不足しています。世話人は、民主的な話し合いと本人の納得のうえで選出されます。会社人間だった方の中には、スキルをもっている、現役時代のストレスを再度繰り返したくないという思いが強い方もいます。また、様々な活動に積極的に参加している方でも、世話人をお願いすると尻込みしがちです。

これは、日頃から世話人の多忙な日常を傍から見聞きし、その大変さを感じているからかも知れません。このままでは、世話人が固定化し、ますます多忙になるという悪循環を起しかねません。

世話人の担い手不足を解決するためには、一つの活動に複数の世話人を選任するダブルキャスト制にし、いつでも交代できるくらいにする、ということが考えられます。ゆとりある活動ができれば気が楽になり、活動そのものを楽しむことができます。楽しさは連鎖し、周りの会員も世話人になることに尻込みしないようになります。運営の担い手に余裕が生まれると、サークル活動や事業活動を地域に広げ、シニアの社会参加を促進させることにもつながります。

そういう意味からも、世話人同士や世話人と地域を結びつけるコーディネーターの養成が急務です。

会では、今年度から、会員一人ひとりの意見が反映される組織運営を目指して、全員が参加して業務の分業と役割分担を進め、実務を通して仲間と楽しみながらグループリーダー等の人材が育つように、組織変更を行いました。

(飛田 健一)

## 《コラム②》

### 地域活動の課題

#### 「子どもを犯罪から守るまちづくり活動」(\*6) から

子どもを犯罪から守るまちづくり活動は、「大人のまなざしと地域のかで子どもを守る」をテーマに取り組んでいるPTAを中心とした地域の大人たちの活動です。

私はこの活動の支援を続けています。昨今、大人は仕事に忙しく、日中、地域に大人の姿が見えません。子どもを見守る地域の目が弱くなると、犯罪の増加につながることを懸念されます。



新小岩地区危険箇所点検活動

そこで、次世代を担う子どもを守るため、お年寄りの方々に、大いに外に出ただきたいと思います。例えば公園の花壇に水をやり、健康器具で体を動かしながら、登下校や公園で遊ぶ子どもたちを見守っていただければと思います。

そのためには、お年寄りの人たちが外に出やすくする工夫も必要です。商店街にベンチを置いたり、公共施設や商店のトイレを開放したり、急な雨には傘を提供する仕組みをつくり、成功している自治体もあります。これらの事例に学びながら、子どももお年寄りも、みんなが安心して、元気に楽しく暮らせるまちになるよう、地域の大人たちが力を出していかなければなりません。

(餌取 愛子)

### 《コラム③》

## ボランティア活動の課題 「放課後子ども事業」の活動から

平成14年度から放課後子ども事業「わくわくチャレンジ広場」を、区民と区との協働・連携事業として実施し、26年度で13年目を迎えます。18年度からは、区内すべての小学校で実施しています。

放課後や土曜日、学校休業日に、小学校施設を活用して遊びや学習、文化・スポーツ活動、体験活動等を行っています。異学年の児童や地域の大人との交流を図り、児童の自主性や社会性・創造性を育むことを通して、児童の健全育成に寄与するとともに、これらの活動を地域の人材が支援する仕組みをつくり、地域の教育力の向上を目指しています。それぞれの学校が、地域にあったやり方で子どもたちの「見守り」を続けています。

ボランティアとして子どもを見守る地域の大人（サポーター）は、事業開始時から継続している人が多く、サポーター平均年齢は65.3歳（25年度）と上がってきています。子どもたちを見守るには、体力、気力、柔軟な創造力、その上忍耐力も必要です。炎天下の真夏の校庭での見守りは、体力的に厳しいものがあります。若いサポーターの加入と世代交代する見極めは、今後の課題となってくると思われれます。

サポーターの指導力の向上を図るため、全サポーターを対象とした独自の研修やスポーツ講習を実施するとともに、「かつしか区民大学」とも連携し「子どもボランティア総合講座」等のサポーターに役立つ講座を実施しています。葛飾区全域のサポーターが集まったの講習会は、他の地域の様子を知るよい機会にもなり、参加サポーターにはよい刺激になっています。サポーターは講習会に参加することを条件としている学校もあります。しかし、講習会は主に平日の午前中に開催されるため、他に仕事をもっているサポーターは、参加したいができない現状も見受けられます。また、開催される会場から離れているサポーターは、講習会への参加が困難になる傾向があり、「各学校で、独自に講習ができれば望ましい」という声も聞きます。

足腰が弱りサポーターを担うことが困難になっても、短い時間の中で得意とする伝承遊び等を子どもたちに伝える指導サポーターとして子どもたちとの交流を続けることは可能です。しかし、活動を継続するためには、日頃から体を動かし、体幹を鍛え、柔軟な身体をつくる等して健康な状態を保つことが大切です。身体の様々な場所を動かすことにより脳が鍛えられ、頭と体により効果が期待できる「コーディネーショントレーニング」（\*7）は、そのための有効な手段のひとつだと考えられます。

（餌取 愛子）

### 3 高齢社会に対応した生涯学習施策

#### －「生きがい支援」から「社会参加」への橋渡し－

前述したように、人が自己実現するためには、各人が関心のある学習・文化活動を楽しむという側面と、自分を取り巻く人との豊かな交流をもつという側面、そして、地域社会の担い手として活動するという側面が必要です。

しかし、自己実現にこのような3つの側面が必要であることが広く理解されているわけではありません。現状では、学習・文化活動を楽しむ講座には多くの受講者が集まる一方で、ボランティア活動を始めると想定した講座への参加者は多くありません。また、これらの講座の受講者でボランティア活動に取り組む人があまり多くないということもあります。さらに、サークルに加入しても組織の運営を担うことを避ける人が多く、役員の交代がスムーズに行われないという課題もあります。

したがって、生涯学習の施策として、「生きがい支援」と「社会参加」のかかわりをわかりやすく示し、そのことを理解し、実践する人を増やす必要があります。

そのための課題として、1つに、地域に出会うための学習・文化活動の仕組みをつくること、2つに、“地域デビュー”のきっかけをつくり、情報を提供すること、3つに、求められる生涯学習を推進するコーディネーターを養成すること、4つに、庁内外の高齢者事業関連部署と連携・協働することが考えられます。

#### (1) 地域に出会うための学習・文化活動の仕組みづくり

退職した人の多くは、これまでは時間がなくてできなかった学習・文化活動に取り組みたいと思っています。その希望を叶えるために、できるだけ多くの人が関心をもっている内容を、参加しやすいかたちで学べる機会をつくる必要があります。

それは、趣味や教養を高めるものから時事的なもの、地域にかかわるものまで、できるだけ多様であることが望まれます。また、初めて学習・文化活動に参加する人の中には、参加者同士の交流が精神的な負担になることもあるので、大きな会場で一方的に話を聞くということにも積極的な意味があります。

しかし、ここで大切なことは、関心のあるものを精神的な負担が少なく学んだ後に、地域で活動するきっかけをつくることです。たとえば、大きな会場で実施されるものであっても、継続的なものであれば、地区ごとに班体制をつく

り、時に班ごとで話し合えば、地域に顔見知りができたり、地域のことを話せる機会になったりします。そのような中で、地域に関心をもち、一緒に活動してみたいと思える人との出会いが生まれます。このように、地域に出会うための学習・文化活動の仕組みづくりが必要です。

## (2) “地域デビュー”のきっかけづくりと情報提供

次に、このようにして地域に出会った人が、地域で実際に活動するようになることが課題となります。

そのためには、地域で活動している様々な団体の活動を紹介する必要があります。その際、一方で、多くの団体の情報を集中して見ることができる「見本市」のような機会が必要であるとともに、他方で、関心のある団体の活動を個別に見学・体験したり相談したりできるような機会を設ける等の丁寧な取り組みが求められます。

また、気の合った者同士と一緒に地域で活動するために、新しい団体を立ち上げることも必要です。そのことを活発にするためには、団体を設立するためのノウハウや公共施設の活用、行政による支援に関する情報が提供されなければなりません。

このように、既存の団体への入会や新しい団体の設立等を通して、地域に出会った人が“地域デビュー”していくきっかけとなる情報を提供することが必要です。

## (3) コーディネーターの養成

高齢期を生きる人が、学習・文化活動を通して地域と出会い、さらに地域デビューにつながるためには、その支援にあたる人材が必要です。

そのために、学習・文化活動を通して自ら楽しむことができ、団体運営に携わるとともに地域活動に参加することで、高齢期を豊かに過ごしている人を対象に、「コーディネーター・リーダー講習会」の開催を提案します。

ここでコーディネーターとして身につけてほしいことは、地域に関心をもった人に活動することの醍醐味を語る力や、団体の立ち上げについてアドバイスを行う力、気後れしているメンバーを排除しないことの大切さを伝える力、民主的に団体運営をするための方法を伝えられる力等です。

このような力をもつコーディネーターが、自身が参加している団体で日常的にコーディネート力を発揮するとともに、必要があれば、身近な場所で講習会を開くことも期待します。

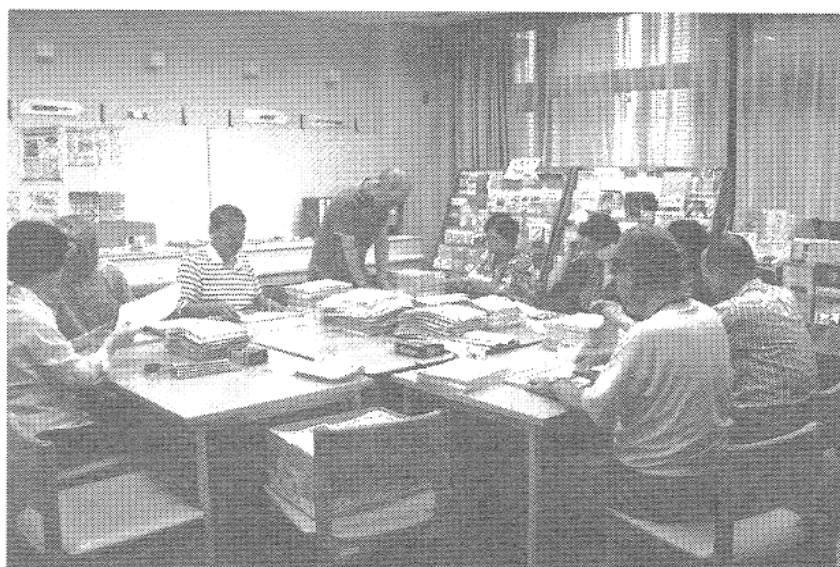
#### (4) 庁内外の高齢者事業関連部署との連携・協働

以上の課題を確かに実行するためには、庁内外の高齢者事業関連部署との連携・協働が必要です。

生涯学習課以外にも行政が提供する学習機会はたくさんあり、高齢化が進む中で、健康や福祉をはじめ高齢期の生活にかかわるものが多く企画されています。区内の高齢者団体やNPO団体、社会福祉協議会も、自主的にあるいは区との協働で、様々な事業を展開しています。このような事業を実施している部署や団体と生涯学習を所管する部署とが、事業を連携・協働して実施することを視野に入れつつ情報交換する会議を設定することが求められます。

また、民間の教育・文化・スポーツ施設との連携も視野に入れて、生きがい支援を考えることも必要です。身近な公共施設を使うことに抵抗感がある人もいると思われます。そういう人にとって、民間の施設は地域に出る第一歩として重要です。

さらに、学習・文化活動を楽しむとともに地域活動を展開する拠点として、区内にある学び交流館(\*8)や地区センターをはじめとした地域コミュニティ施設の活用も大切です。



シニア活動支援センターでのミニコミ誌づくり

(葛飾アクティブ.COM)

## 4 学習・文化活動から地域活動への架け橋 —施策のイメージ—

高齢社会における生涯学習の施策として、3つの提案をします。

これらは、どれをとっても1つの部署で完結できるものではなく、区民や関係部署との連携があって実施できるものと考えます。なにより、区民・団体の間に取り組みに向けた機運が高まっていくことが、実施の前提となるでしょう。また、その機運を高めていくことも生涯学習の課題といえます。

### (1) 地域に出会うための学習・文化活動の機会

高齢期を迎えた人の学習・文化活動のニーズは多様です。そしてさらに、地域活動への参加希望や参加形態も様々です。一人ひとりが、まずは自分のやりたいことを楽しみ、そこから人間関係や社会的な役割に視野を広げることを展望することが大切です。

そのためには、まず、文化活動やスポーツに参加する人が増える必要があります。自治町会や高齢者クラブのサークル、公共施設を拠点に活動している団体の情報や、民間の施設が提供している文化・スポーツ事業に関する情報を広めるとともに、コーディネーターが中心となって、初めての人が参加しやすい雰囲気をつくるのが大切です。

このような活動は区民の健康づくりに貢献します。スポーツやレクリエーション活動は筋力や肺活量を高める等、健康づくりを直接の目的にしていますが、文化や学習活動も人や社会とかがかわることで意欲的に暮らすことができるという点で、健康づくりにつながります。

高齢期は、様々な生活上の不安や困難を抱えながら生きる時期でもあります。健康の維持や福祉サービスの使い方、災害対策、お金の管理、食事づくり等を学ぶことで、生活上の不安を減らすことが求められます。

また、人生を締めくくるにあたって何をするべきかと考える人も多くいます。「自分史」を書くことで、自分の人生を見渡し意義づけることができる機会があることが望まれます。それは同時に、自分が生きてきた地域や歴史を改めて見つめることにもなるので、そのような学習の機会も必要です。

このように、学習・文化活動を通して、心が活性化したり、老いることへの肯定感が育まれたりすると、地域活動にかかわることにも積極的になることが多いようです。地域では、高齢者同士の支え合いや子育てへの支援、環境の保全、地域の美化、地域の安心・安全、地域文化の創造等様々な分野で、高齢期



の人の参加を求めています。

しかも、これらの活動を通して世代間の交流を進めることができれば、より望ましい状況になります。異なる世代の交流は、青少年と高齢者、双方にとってメリットがあり、今後とも広げていくことが求められています。

学習・文化活動で楽しみ、健康づくりがすすみ、高齢期の生活課題を考え、人生の締めくくりにふさわしい学習に取り組み、地域活動に参加する。このような豊かな高齢期をともにめざす魅力的なコーディネーターを養成する「コーディネーター・リーダー講習会」のあり方も検討し、実践していく必要があります。

#### 《コラム④》

#### 世代間交流の実際

#### 「NPO法人 葛飾アクティブ.COM」の活動から

葛飾アクティブ.COMは、シニアを対象に様々な催しを行う一方で、水元憩い交流館の「地域交流まつり」、地区センター等での「健康フラの祭典」、竹とんぼ・健康布ぞうり・新聞ちぎり絵・土づくり等のサークルが参加した「かつしか環境・緑化フェア」や、竹とんぼサークルが参加した市民活動支援センターでの「コラボかつしかまつり」等で、毎年子どもたちとシニアの世代間交流を行っています。

竹とんぼづくりと飛ばしも、郷土と天文の博物館をはじめとした区の施設で開催し、平成25年度は800人強の子どもたちが参加しました。25年度に引き続き26年度も、東京都済生会看護専門学校の生徒たち（延べ120人）が、健康ダーツ・太極拳・健康フラ・布ぞうり・シニア卓球・新聞ちぎり絵・リズム体操の7つのサークル活動と「思い出の歌を歌おう会」の自主事業をシニアと一緒に体験し、世代間で理解を深め合いました。

子どもたちにベーゴマ・メンコ・ビー玉等の昔遊びを教えるシニアも、逆にスマートフォンやタブレット等の使い方を子どもたちから教わる機会があれば、子どもとシニアの新たな交流の場となりえます。さらに彼らの両親、祖父母等まで世代間の交流を広げられる可能性があります。今後は、このような双方向の交流を意識していきたいと考えています。



7歳から74歳まで参加した  
「どんぐりであそぼう！教室」

(飛田 健一)



## (2) 団体や事業の情報提供・団体紹介・交流イベント（見本市）の開催

高齢期を生きる人たちが楽しみや生きがいを見つけるには、学習・文化活動を行っている団体や事業の情報提供が必要です。その情報も、紙媒体に一覧化された文字情報より、担い手と対面し話ができるならば、訴求力はぐっと高まります。団体を紹介し交流を促進させるイベントの開催には、大きな効果が期待できます。

東京都品川区では、毎年2月に「社会貢献活動しながわ」という団体紹介・交流イベントを実施しており、平成26年には6回目を迎えました。参加団体の属性は多岐にわたり、町会・自治会、NPO法人、ボランティア団体、商店街、大学、企業等、102団体にのびります。「区民と区との協働で、私たちのまち品川区をつくる」というねらいのもとに重ねられてきたイベントの26年のテーマは「わかり合おう！広げよう」でした。

当初、このイベントの名称は「社会貢献活動見本市」で、異なる出自の団体がブースを並べてそれぞれの活動を紹介しあう、まさに市場のようでした。それが、回数を重ねるにしたがって企画も洗練され、また団体間の交流も進んできました。「しながわ社会貢献アワード」という企画では、地域に根ざした社会貢献活動や協働事業、企業のCSR活動(\*9)等から、イベント参加者の投票をもとに斬新な活動を表彰しています。

この品川区の事例からは、施策のイメージとして、次の3点を学ぶことができます。

1点目は、初めて学習・文化活動に取り組もうという人たちにとっての、既存の団体との出会いの場の提供です。文字情報からは実感しにくい、具体的な作品や成果物、あるいは団体やメンバーの雰囲気といったものまでを、対面することによって直に感じ取ることができ、参加への敷居を低くしてくれます。

2点目は、既存の団体にとっての、会員および事業拡大の機会の提供です。魅力的な活動をしていても広く知られる機会がなければ、新たな会員を集めたり事業を拡大したりするきっかけは生まれにくいものです。多くの団体が一堂に集うことによって、一団体では実現しにくい集客力も生まれてきます。

3点目は、これまでにない新しい発想の企画が生まれることへの期待です。日常的には接点をもちにくい団体間でも、一緒にイベントを企画し実行するという過程を通じて、新たな関係性が生まれることもあります。このような活動こそ、文字どおりの「協働」事業であるといえます。

さらには、上記の3点を集約したガイドブック（事業案内）を作成すること

も有益でしょう。交流イベントを通して興味をもった団体の連絡先がまとまって一覧化されていれば、イベントが終了して時間がたってからでも、問い合わせ等が可能になります。また、お祭りとして一過性のものとせず、記録を蓄積していくことも可能となります。

### (3) 「かつしか区民大学」で高齢者の地域活動に向けた仕組みづくり

葛飾区では、すでに「かつしか区民大学」として多様な形態で講座を開催しています。「かつしか区民大学」には、①区が企画する講座、②区民運営委員会が企画する講座、③大学等の区内教育機関との連携講座、④各種団体との連携・協働講座に加え、特別講演会という5つの形態があります。

区が企画する講座および区内教育機関との連携講座は数も最も多く、葛飾区の生涯学習事業への入り口の役割を果たしています。

各種団体との連携・協働講座は、専門的な能力をもった団体と区がともに実施することで、より進んだ学習を提供することができます。

特別講演会は、いきなり講座に参加するにはためらいのある人にも、生涯学習事業を知ってもらうという、幅広い層への呼びかけの機能があります。

区民運営委員会企画講座は、運営委員として委嘱を受けた区民自らが講座を企画することを通じて、従来にない斬新な内容と方法の講座を実施しています。運営委員は、自ら企画者となることによって、担い手の側に立つルートが開かれています。また、企画の過程を通して、それまでに参加してきた既存の講座に対する見方にも変化が生じることが予想され、個人ではなく委員会として企画をしていく中で、ともに活動する仲間を見つけることもできます。

区民運営委員会企画講座は区内全域を対象としたものですが、このような経験をもとにして、各地域で開催される「わがまち楽習会」(\*10)が活性化することも期待できます。

また、「かつしか区民大学」の1分野である「かつしかひとづくり・まちづくり・未来づくり」の中で、子育て・地域参加・読み聞かせ・環境・農業・健康・災害・手話等、様々な分野の担い手の養成をめざす講座を開催しています。ボランティアセンター所管の「ボランティア学」講座(4講座)では、ボランティアを始めようという人が実践的・体験的に学べる「ボランティアスタート体験講座」も行っています。

今後、「かつしか区民大学」の講座では、高齢者支援課をはじめとする関連部署との連絡・調整を深めて、高齢者が強く関心を寄せる講座を開発するとともに、多世代が交流するきっかけとなる事業を展開していく必要があります。

## おわりに

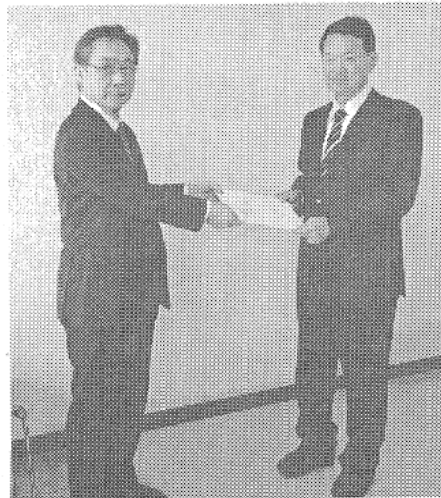
今、私たちが生きている社会は、物質的豊かさを追求する社会から、精神的な豊かさを重んじ、多様な価値観を認め合う社会へと移行しつつあると言われています。

このような社会では、学びたいときに学びたいことを学びながら、異なる文化や価値観に触れ、自己実現し、新しい価値観を生み出すことで、本当の意味で豊かな社会をつくっていくことが求められています。そのための学習が、生涯学習なのです。

葛飾区は“4人に1人が高齢者”という超高齢社会に入っています。高齢期の人々が、人生の締めくくりを尊厳と生きがいをもって心豊かに生きることができる社会は、全ての人々の幸せにつながります。そういう意味からも、高齢期の人たちが自己実現しながら地域社会で力を発揮できる、高齢社会に対応した生涯学習・社会教育のあり方を展望する必要があります。

私たち社会教育委員の会議は、2年間にわたって協議を重ねた結果を、ここに「提言」としてまとめました。

本提言の趣旨が十分に理解され、速やかに実現に向けた施策につなげられることを願ってやみません。



辻議長から塩澤教育長へ提言の提出